

本日、学部を卒業される皆さん、大学院前期課程を修了される皆さん、博士の学位を授与された皆さん、本当におめでとうございます。神戸大学文学部・大学院人文学研究科を代表いたしまして、心からお祝いを申し上げます。

現在、新型コロナウイルスの蔓延により、卒業式の開催も不可能となり、大学の教育研究が危機に見舞われ、文学部の学舎も人気がなく閑散としています。このような中で、私は、私たち教員と学生の皆さんが、ともに学んできたこの場が、当然の如くあるものではないことを痛感させられています。

人文学は人間とはなにか、そして人々がそれが構成する社会とはなにかを様々な領域から解明することをめざす学問領域ですが、そこでの学知の継承も、人と人とのつながりの中で、世代を超えて未来に伝えられていくものです。私たちがいるこの場もまた、70年にわたる文学部の歴史の中で、多くの学生、教職員の努力の中で培われ、皆さんに引き継がれてきたものです。

このような形で、人文学に関して教員と学生が濃密な環境の下で教育を受けることができる場はほとんどありません。日本全国の同世代で3千人程度であり、各分野レベルでは、100人にも満たないことが一般的です。その意味では、大学院生だけでなく、学部卒業生の皆さんもまた人文学各分野の専門家なのであり、そのことを卒業に際して誇りにしていただければと思います。

新型コロナウイルスの蔓延は、そのこと自身が極めて深刻なものであるだけでなく、グローバル化する現代社会の中で、私たちが生きていくこと、「生存」そのものがいかに困難であるのかを見せつけるものでもあります。このような中で、皆さんが専門家として学んできた人文学はどのような意味を持つのでしょうか。

一見人文学はこのような事態への対処と遠いところにあるように見えます。しかしながら、私は、このような危機の時だからこそ、未来に向かって、人が人らしく生きることとはどういうことなのかを具体的な研究の中から問う人文学の意味は大きいと思います。皆さんが文学部で学んできた人間と社会を深く捉える力は、これから長い人生の中で、皆さん自身にとって意味を持つだけでなく、皆さんが会おう多くの人々にとっても重要な意味を持つものであると確信しています。

私たち教員も、昨年10月から、神戸新聞で、月1回、一面を使った大型寄稿「21世紀の人文学－危機の時代を共に生きるために」を連載しています（神戸新聞のホームページからも読めます）。また、一昨年発足した神戸大学出版会から『地域歴史遺産と現代社会』『マンガ／漫画／MANGA－人文学の視点から』等を刊行するなど、これまで以上に、社会的な発信力を強めています。今後、社会人として、皆さんから鋭いご意見を期待しております。

人文学的な知の探求は、大学で終わるものではありません。これからも社会の中で「専門家」として、その力を磨いていただくことを期待しています。その意味で文学部という場が、卒業生の皆さんにとっても、開かれた場でありつづけることができるよう、私たちは努力したいと思っています。今年度は、残念ながら卒業生が一同に会することが出来ませんでした。秋のホームカミングデーには、ぜひもう一度、卒業生の皆さんの元気な顔を見せていただけるよう、企画を練っていきたくて考えております。ぜひご参加ください。

以上を持ちまして、簡単ながら私の祝辞といたします。

令和2年3月25日

神戸大学文学部長、大学院人文学研究科長 奥村 弘